

## はしがき

---

本書のねらいは、日本社会に定着している「巨大ロボット（アニメ）」を社会学的知見（必要に応じて、人文科学的な思想や概念なども動員する）に基づいて考察することにある。そして、社会学的な切り口から「巨大ロボット（アニメ）」を解釈することによって、日本の文化における巨大ロボットとは何なのか、それに託して何が描かれてきたのかを明らかにしたい。

アニメの社会学（およびその周辺学術領域）的研究といっても、さまざまな切り口がありうる。なんといっても、社会学自体がさまざまなアプローチの混在する雑多な学問領域である。ここでは、同じように「物語」を扱う文学社会学を手がかりにしてみたい。ジゼル・サピロは『文学社会学とはなにか』（2014=2017）の冒頭で、文学を研究する社会学的な問いを2つのタイプに分けている（サピロ 2014=2017：7）。

1つ目の問いは、「社会現象としての文学についての問い」である。すなわち「作品を生産し、消費し、評価する多くの制度や個人」についての研究である。アニメでいえば、生産としてはアニメ制作会社や製作委員会、マーケティング、マーチャンダイジングなどが挙げられるだろう。消費としては、アニメの視聴者やファンの行動が、評価としてはアニメジャーナリズムの問題などが挙げられるだろう。

2つ目の問いは、「文学テキストのなかに時代の表象や社会学的争点がいかに刻印されているかについての問い」である。これは、作品の中身やその解釈にかかわる。本書の内容に即していえば、巨大ロボットの登場する物語で描かれる出来事や人間関係のなかに、社会学的争点を読み込むというアプローチになる。

本書では、主にサピロの挙げる第二の問いに取り組む。すなわち巨大ロボットアニメというテキストのなかに“社会学的争点がいかに刻印されているか”を明らかにする試みである。第一の問いについては、巨大ロボットのアニメ以外の領域への展開を取り扱う。

サピロのいう2つのアプローチを踏まえて、本書は3つの部から構成されている。

第Ⅰ部は、本書の全体的な問題関心と基礎的な事実を提示する部である。第1章では、「巨大ロボットの想像力」の内実について追及している。本書で考察の対象とする「巨大ロボットの想像力」とは何を意味するのかが語られる。この章は、本書の根幹にかかわる部分を説明しているため、ぜひ最初に読んでほしい。続いて第2章では、巨大ロボットアニメのTV放送作品数の推移を、第3章ではアメリカを中心とした海外での受容の状況について説明する。

第Ⅱ部においては、先に説明した、巨大ロボットの登場する物語で描かれる出来事や人間関係のなかに、社会学的争点を読み込むというアプローチ（第二のアプローチ）により、巨大ロボットアニメを分析する。社会学（およびその周辺領域）から「身体」「ジェンダー」「組織」「宗教」そして「戦争」をテーマとして取り出し、その観点からロボットアニメを分析する。

第Ⅲ部は、アニメを超えて広がる「巨大ロボットの想像力」を取り扱う部である。具体的なテーマとして、「ゲーム」「玩具／模型」「観光」を取り上げている。

\*            \*            \*

最後に、この本を企画するにいたった経緯も述べておきたい。

以前、社会学の学説研究にかかわる単著を執筆中に、いわゆる“スーパーロボット”のイメージと、トマス・ホップズの『リヴァイアサン』の表紙に描かれた人造人間がとても似ていることに気づいた。もちろん、そのような言葉は使われていない。しかし、表紙に描かれている巨大な人造人間は、人々を守るために、人間を模倣して作られた巨大な存在である（ホップズ 1651=1992a: 37）。また、「かれらのすべての権力と強さと」を与えられた、権力の集権化された姿である（ホップズ 1651=1992b: 33）。スーパーロボット風にいえば、“人類の科学の粋を集めた”あるいは“チームの力をひとつにした”と読み替えることができよう。加えて、この存在は「同意や和合以上」の存在であるため（ホップズ 1651=1992b: 33）、「合体」というモチーフにもつなげることができる。合体後の存在は、合体前の個々の部分の総和以上の存在なのである。つまり、ホップズのリヴァイアサンは、平和の守護神であり、人類の力を結集した

最強の姿であり、合体のモチーフももつ。まさに、スーパーロボットと呼ぶにふさわしい。

などということ思いながらも、このような“とぼけた着想”も特段深めることのないまま日々を過ごしていた。ところがある日、元法律文化社の編集者であった上田哲平さんより、「『ガンダム』あるいはもっと広げて『スーパーロボット』で社会学の本を作りませんか」ともちかけられたのである。なぜそのような突拍子もないことを言うのかと理由を聞くと、上田さんは学生の時に私の大学での授業を履修しており、その授業のなかで私が「ガンダムは社会的に分析できる」と言っていたらしい。私はまったく記憶にないが、上田さんはそれを覚えていてくれたのである。

正直、はじめていわれたときは断ろうかとも考えた。たしかに『機動戦士ガンダム』(1979)をはじめ、いくつか好きな作品はある。小学生および中学生のときには、「ガンブラ」にもハマった。いまでも、気にいった玩具やフィギュアが発売されれば、ポチポチ買っている(箱を開けて、遊ぶ時間はないが)。しかしながら、知っているロボットアニメはほんの一部であるし、アニメの表現技法や業界に通じているわけでもない。しかし、先に述べた“とぼけた着想”がずっと頭にあり、また、好きだった巨大ロボット文化に対して、何らかの貢献ができるといううれしさもあって引き受けることにした。

ただ引き受けてみると、思った以上に大変な道のりだった。道なき道を進もうとする企画であるため、私を含めた編集者および執筆者の全員が、頭を痛めたに違いない。気がつけば、第1回目の編集会議の開催から時間が経過し、その間に上田さんも会社を移ることになり、同じく巨大ロボットに関心をもつ八木達也さんに引き継いでもらうことになり、ようやく刊行まで漕ぎ着けることができた。

ここまで来ることができたのも、私以外の編集者の小島伸之先生、木村至聖先生をはじめ、こちらの“むちゃぶり”をおもしろがって引き受けてくれた執筆者の方々、そして上田さん、八木さんのおかげである。ここに、記して感謝の意を表しておきたい。

\* \* \*

本書は「巨大ロボットが好きだ」という感情と、社会的な知識の出会いの

産物である。いわゆる巨大ロボットアニメ作品の体系的な紹介・解説でもないし、新たな資料の発掘や関係者への取材に基づいてアニメ史研究に資する試みでもない。巨大ロボットを社会学的に読み解くことが、本書のテーマである。社会学者が、巨大ロボット文化と向かい合ったときに生まれるスリリングななぞ解きを楽しんでもらいたい。この本を読んで、巨大ロボットアニメが気になったならば、その作品を実際に見てほしい。社会学に興味を持たれた方は、社会学の本を手にとってほしい。本書が巨大ロボットアニメや社会学との出会いの契機となることが、執筆者全員の願いである。

2019年7月

編者を代表して 池田太臣